

シェイクスピア原作の舞台芸術作品の上演とその受容をふりかえる オペラとバレエを中心に

高橋百合子

I 序論

シェイクスピアを原作とする様々な舞台芸術作品は、近年ますます存在感を増してきている。日本における最初のシェイクスピア原作のオペラ上演は、大正10年（1921）、ロシア大歌劇団によるグノー『ロミオとジュリエット』、当時「西の帝劇」と言われた神戸の聚楽館における上演であった。その後第二次世界大戦を経て、1959年NHKが招聘したイタリア歌劇団のヴェルディの『オテロ』で本格的な上演が再開される。一方バレエに目を向けると、シェイクスピア関連のバレエ上演の端緒は1956年貝谷八百子率いる貝谷バレエによる『ロミオとジュリエット』まで遡れる。とはいえ、オペラ、バレエとも上演数が一気に増えるのは1980年代以降で、それ以降今日に至るまで、海外団体のみならず、国内団体による数々の画期的な上演を含め、多くの作品が上演され続けている。本発表では、80年代以降日本で上演されたシェイクスピア関連のオペラとバレエの上演を振り返る。

II 日本におけるシェイクスピア原作のオペラ上演について

日本におけるシェイクスピアを原作とするオペラ作品の上演を俯瞰すると、昭和音楽大学のデータベースによれば、これまで300以上の上演記録がある。この中には国内団体による公演のみならず、海外団体や市民団体、さらには音楽大学の学生による公演も含まれる。1980年代以前は、24公演しか上演実績がなかったこと考慮すれば、驚異的な増加と言える。今回は、80年代以降の公演から、画期的な上演により日本におけるオペラ上演の変遷をたどることができる3つのヴェルディの『マクベス』、上演数の多い『ウィンザーの陽気な女房たち』原作のオペラ、さらに二つの貴重な『リア王』関連作品を取り上げる。

ヴェルディの『マクベス』は、1974年に二期会により既に日本語での上演があったが、ここで注目したいのは1987年藤原歌劇団による上演である。この上演は、マクベス、マクベス夫人、バンクォーの三役を当時世界最高と言われたキャスト、そして指揮者と演出家を海外から招聘し、日本の団体が実現した原語上演であった。これは日本の団体がこのようなスタイルで、世界標準の上演が可能であることを証明し、その後の度重なる再演や、他公演にも繋がった画期的な上演であった。次に、2005年の新国立劇場での野田秀樹演出のヴェルディ『マクベス』に注目したい。この上演は野田のオペラ初演出として非常に大きな話題となった。野田演出は、魔女たちの役割を合唱に担わせる演出が印象的で、幕間に緞帳の前で観客を巻き込むなど、当時としては新鮮な演劇的演出で話題をさらい、シーズン中2度にわたり上演された。その後再演されることなく現在に至っているが、野田がオペラを演出したのは、この『マクベス』と後の『フィガロの結婚』のみであり、貴重な上演となったのは疑いない。もう一つ、2013年二期会によるペーター・コンヴィチュニー演出『マクベス』を見ていく。これはライブツィヒ歌劇場との共同制作で、コンヴィチュニー独特の読み替え演出による上演である。「魔女たちの復讐」と銘打って、抑圧された女性たちの象徴としての魔女たちが男性優位社会に復讐する枠組みで『マクベス』を再解釈し、通常ならばマルカムの戴冠で華やかに終わる幕切れが、魔女たちが自分たちの復讐の物語をラジオで聞くという演出で、生音ではなく、ラジオから音楽が流れてくる衝撃的な演出であった。他にも『マクベス』の上演は続いており、2015年ロイヤル・オペラ日本公演におけるフィリダ・ロイド演出の全幕上演、最近では演奏会形式で2019年4月東京・春・音楽祭でリッカルド・ムーティ指揮、また2024年9月にもチョン・ミョンフン指揮、東京フィルの全幕上演があり、加えて市民団体の上演もあり、今や定番の作品となりつつあるのは疑いない。

『ウィンザーの陽気な女房たち』を原作とする作品は、何と言ってもヴェルディの『ファルスタッフ』であり、日本の歌劇団でも、海外の歌劇団の公演でも頻繁に上演されてきた。これまでの上演史を改めて確認すると、音楽大学の学生による上演実績が非常に多いことに驚かされる。教材としてのシェイクスピアは、今や大学のカリキュラムの中で冷遇される一方、音楽大学においては、それほどメジャーとは言えないこの作品を原作とする『ファルスタッフ』が重要な役割を果たしていることは興味深い。また、この原作のオペラ化では、オットー・ニコライのジグシュピール（歌芝居）『ウィンザーの陽気な女房たち』も、学生及び市民団体による上演を含め、上演数が比較的多い。さらに、アントニオ・サリエリもオペラ化しており、こちらは上演数が3回と非常に少ないが、そのうちの1回が1988年東京グローブ座開場時の「東京グローブ座オープニング・ガラ・オペラ」でのモーツァルト劇場による上演である。1988年の東京グローブ座が開場は、日本におけるシェイクスピア上演史に非常に大きなインパクトを与えたことは疑いないが、オペラやバレエの上演史にも少なからぬ影響を与えたことを付け加えておきたい。

最後に『リア王』を原作とするオペラ上演を二つ取り上げたい。まず細川俊夫作曲の『リアの物語』について触れておきたい。この作品は、作曲者の細川自身が、鈴木忠志の『リア王』の上演に衝撃を受けたのをきっかけ

に作曲された。『リア王』を一人の老人の回想として描く、鈴木忠志の演出の枠組みで構成され、1999年4月ミュンヘンで初演された後、6月に静岡のグランシップで日本初演、その後東京でも上演され、2015年には広島でも上演された。もう一つは2015年日生劇場における、アリベルト・ライマン作曲『リア』の上演である。この上演に際しては作曲者のライマン自身も来日し、レクチャーやシンポジウムも開催された記念碑的な企画であり、キャストはもちろん、演出、指揮、オーケストラすべて日本人により、原語上演された画期的な上演であった。

III 日本におけるシェイクスピア原作のバレエ上演について

ここからは、シェイクスピア原作のバレエの上演を振り返っていく。日本におけるシェイクスピア関連のバレエは前述のとおり比較的早くから上演されていたが、ここでは、最も頻繁に上演される『ロミオとジュリエット』関連作品をまず取り上げ、次に、時代を象徴する作品や、続々と生み出される新作などについても触れていく。

『ロミオとジュリエット』を原作とするバレエは圧倒的な上演数を誇り、昭和音楽大学バレエアーカイブによれば、1980年以降だけでも、全幕の上演が326回、全幕ではない公演も298回にのぼり、レオニード・ラヴロフスキー、ユーリ・グリゴローヴィチ、ケネス・マクミラン、ジョン・クランコ、ルドルフ・ヌレエフ、ジョン・ノイマイヤー、ジャン＝クリストフ・マイヨーなどの概ね原作に忠実な振付版に加え、アンジュラン・プレルジョカージュ振付の比較的珍しい版など多様な版で全幕上演されている。最近でも、2024年4月にはマシュー・ボーン版『ロミオとジュリエット』、6月には東京バレエ団でクランコ版と牧阿佐美バレエ団の牧版も上演された。90年初演のプレルジョカージュ版は移民と上流階級の少女との恋という設定で、四半世紀経た今まさに現実的な設定の作品として改めて注目に値する版となっており、また日本上演の記憶も新しいマシュー・ボーン版は、矯正施設の抑圧された状況下の若者たちの苦しい恋という設定で作品の新たな解釈を提供する翻案である。このような多様な全幕版の継続的な上演に加え、新作も続々と上演されている。一例をあげれば、2024年夏、世界で活躍するダンサーたちの意欲的な公演『THE NEW BALLET CLASSIC』において、堀内將平振付、男性ダンサー二人による『ロミオとロミオ』が上演され、若い世代の振付家やダンサー自身が意欲的に新作の創作や上演に取り組む姿勢が見られた。

1980年代以降で何と言っても特筆すべきシェイクスピア関連のバレエ上演は、1986年のリンゼイ・ケンプ・カンパニーの来日公演であろう。幻想的で独特の世界観を体現した公演のインパクトは絶大なもので、その後も何度か来日し、『真夏の夜の夢』が再演され、映画化もされ、まさに時代を象徴するような上演であったと言える。リンゼイ・ケンプ・カンパニーの公演はあまりにもインパクトが強いが、一方で『夏の夜の夢』バレエ関連作品も『ロミオとジュリエット』に次いで上演数が多く、今日に至るまで頻繁に上演され続けており、演劇的なフレデリック・アシュトン版、伝統的なバレエの様式を踏襲したジョージ・バランシン版が主流であるが、さらにそれぞれ特徴のあるジョン・クランコ版、ジョン・ノイマイヤー版などが加わり、幅広い層の観客を得ている。

ここで、少し時代を遡るが、シェイクスピア関連のバレエにおいて忘れてはならない上演として1960年代から横井茂演出・振付による東京バレエグループによる一連の上演をあげておきたい。日本人によって振付され、日本のカンパニーの日本人のダンサーによって上演された一連の作品は、『ハムレット』、『リチャード三世』、『マクベス』、『オセロ』、『リア王』、そして1970年の『ロミオとジュリエット』まで続き、一旦中断するが、1988年の東京グローブ座開場を機に上演が再開され、『夏の夜の夢』、『リチャード三世』『オフィーリアは水の精』、『リア王』、『冬物語』、『テンペスト』など、新作を交えながらグローブ座で上演された。

最後に新国立劇場での二つの作品、2011年初演（2013年、2020年再演）、中村恩振付『Shakespeare THE SONNETS』とウィル・タケット振付『マクベス』にも触れておく。前者はソネット集から三篇（no.144、127、3）を選び、詩人、ダークレイディ、美青年に加え『ロミオとジュリエット』、『オセロ』、『夏の夜の夢』、『ヴェニスの商人』などの登場人物を通して、独特の世界を描き出した非常に示唆に富む作品。後者は、本来2020年新国立劇場における、ジャンルを超えたシェイクスピア作品（鶴山仁演出『リチャード二世』、ブリテン『夏の夜の夢』、新作バレエ『マクベス』）を同シーズンに上演するという企画の一環であったが、コロナ禍のため新作の製作は延期となり、2023年アシュトン版の『夏の夜の夢』とダブル・ビルでようやく上演された。この新作のハイライトは、マクベス夫人の夢遊病の場面、マクベスの独白に当たる場面、そして原作にはない、マクベスが亡くなった夫人を悼む絶望のヴァリエーションなどであろう。

IV まとめ

以上、1980年代以降の日本におけるシェイクスピア関連のオペラとバレエの上演を概観してきた。1988年東京グローブ座の開場は、日本におけるシェイクスピア上演史の分岐点となったが、ジャンルの垣根を越えて、シェイクスピア関連のオペラやバレエの上演に少なからぬ影響を与えた。1980年代以降、世界的な潮流の変遷に伴い、現実の世界を映し出す舞台作品の上演は驚くほど多様化して現在に至っているが、今後は、またどのような新たな地平が開けていくのか、引き続き注目していきたい。